HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター　第27号
Issue Date	2017-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68516
Type	journal
File Information	newsletter27.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第27号　2017年8月

北海道大学 Hokkaido University
Archaeological Research Center News Letter

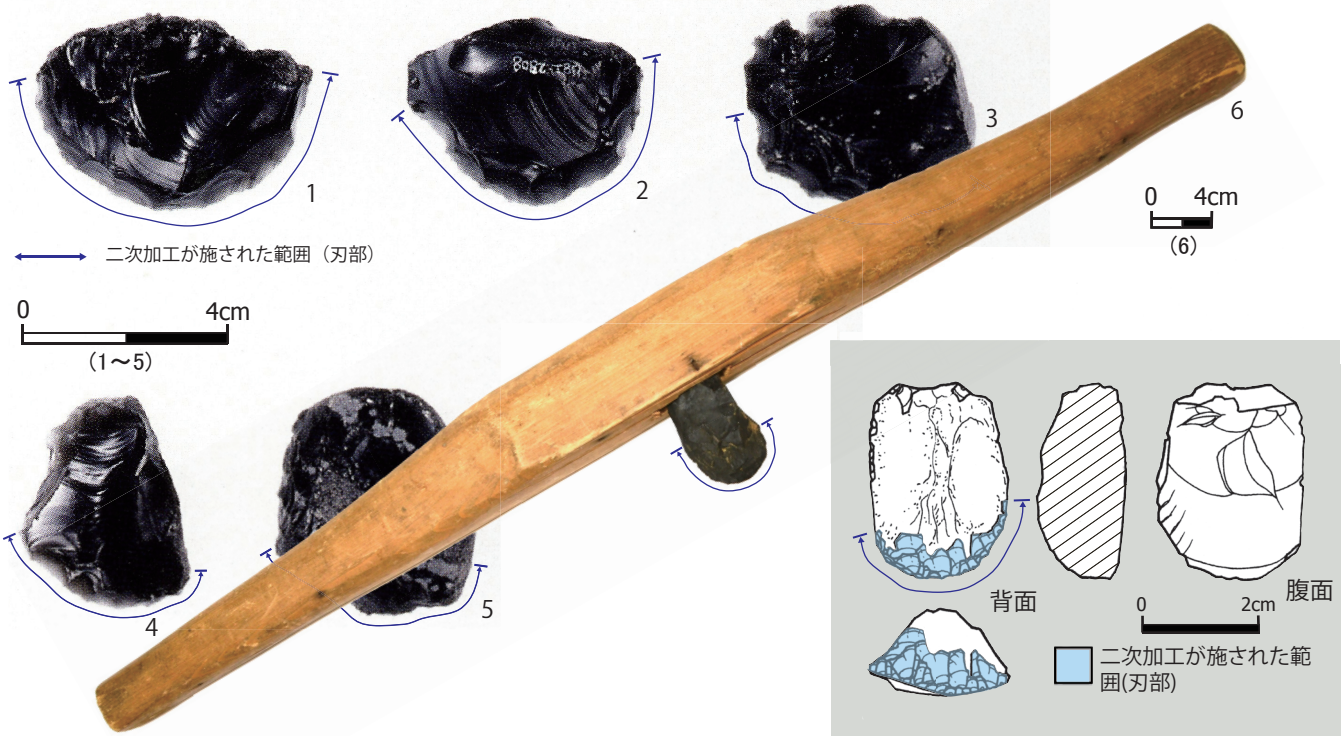
埋蔵文化財調査センター ニュースレター

特集　掻器（そうき）と皮鞣（かわなめ）し

動物の皮革は、その保温性・防水性・柔軟性のゆえに、人類にとって古くから衣類・寝具類・袋類・テント用覆い・船などの材料として重要視されてきました。ただし動物の生皮は、腐りやすいうえに硬直化しやすく、生皮を剥いだままでは使用に適さないので、肉・脂肪の除去、洗浄、乾燥、伸展、柔化といった皮鞣しの作業が必要となります。こうした皮鞣しの工程の一部には掻器と呼ばれる石器が用いられていたことが分かっています。

掻器とは、素材となっている剥片や石刃の端部に、二次加工によって円弧状の刃部が作り出されているものを指します。円弧状に刃部が整形されているがゆえに、掻器は皮革を傷つけることなく肉・脂肪の除去を可能にしたのでしょう。北海道大学構内の縄文晩期や続縄文期の多くの遺跡（地点）では、この掻器が出土しています。とくに、続縄文期後半の後北C2-D式（3～4世紀）や北大式（5～7世紀）の時期の地点からは、掻器が数多く確認される傾向があります。こうした掻器は、各地点で実施されていた皮鞣し作業の存在を反映している可能性が高く、この時期は皮革製品の生産が活発化していたことを示唆する重要な物証の一つといえるでしょう。どのような動物の毛皮の皮鞣しがおこなわれていたのか、直接的な証拠は残されていませんが、この時期の遺跡からは、鹿だけでなく小形動物の骨も発見されており、キツネやテンなどの利用が想定できます。

本特集では、北海道大学構内の遺跡（地点）から出土する掻器は、時期的にどのように変遷するのか、また使用の実態はどのように明らかにされているのか、についてご紹介していきます。

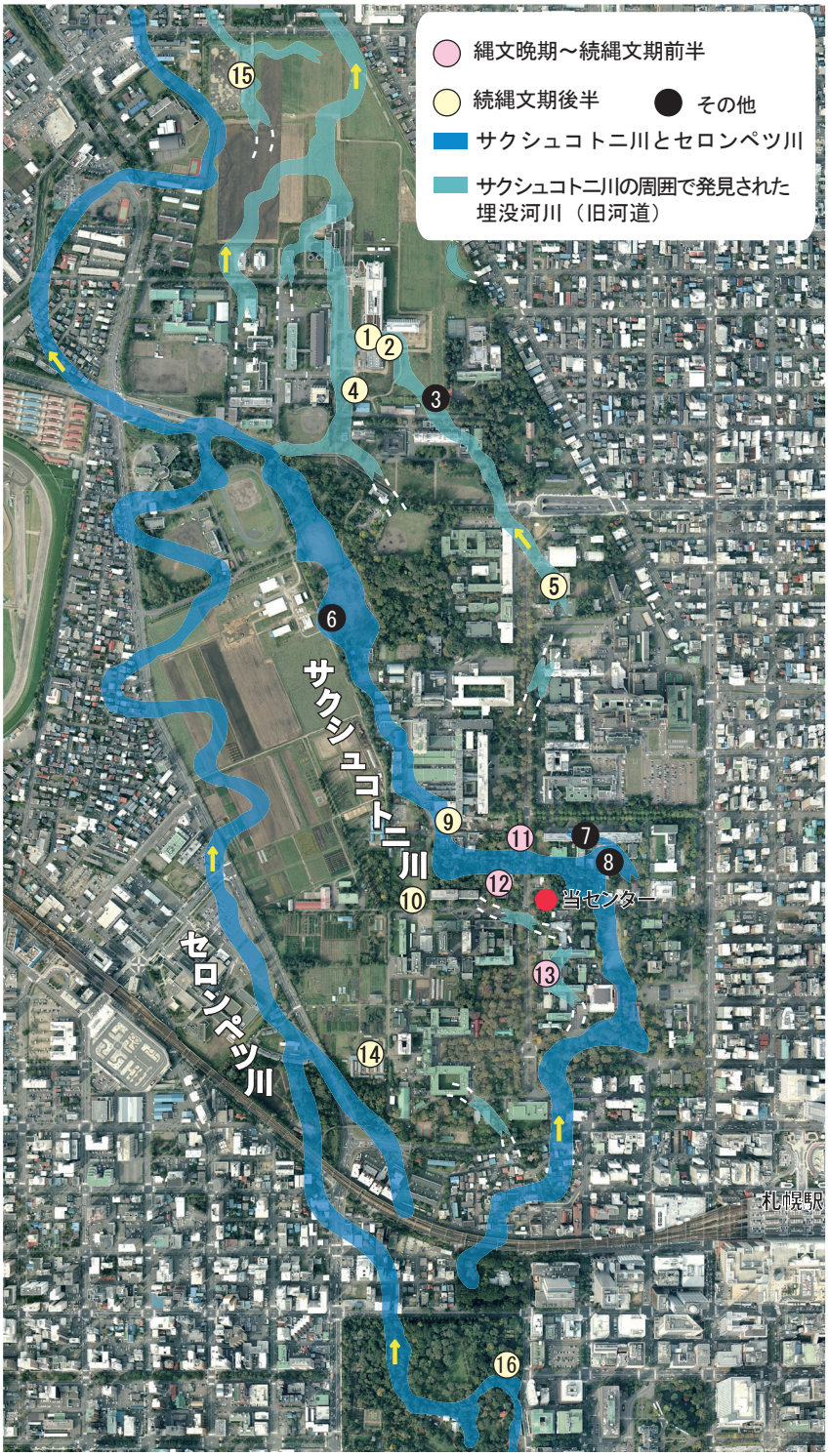


▲工学部共用実験研究棟地点から出土した黒曜石製掻器（1～5）とカムチャッカ半島の民具にみる木柄に装着された掻器（6）

考古学的な遺跡からは 1～5 のように石器の掻器が確認されるだけですが、実際の使用の過程や装着状況を推定するためには、実験や民族例が参考になります。6はトナカイの皮鞣しに実際に使用されていた掻器で、木の柄に装着されて用いられていました（操作法については3頁参照）。

掻器における刃部の位置

掻器が出土した地点



(A)炉址周辺からの出土状況

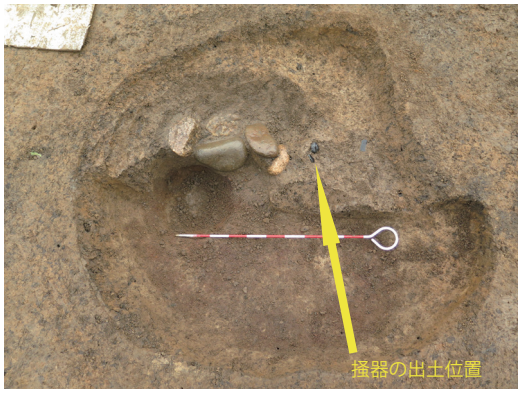




▲工学部共用実験研究棟地点(⑨)における北大期の掻器の出土状況

続縄文期後半の地点では屋外炉址の周辺から掻器、その二次加工剥片もしくは刃部再生剥片が出土する傾向が認められます。炉址周辺で掻器が利用されていたことを示唆しています。

(B)墓坑からの出土状況



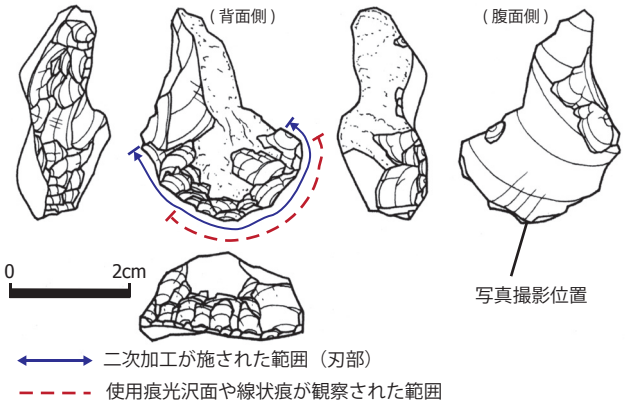
▲農学部実験実習棟地点(⑭)における北大期の土坑(PIT17)覆土から出土した掻器

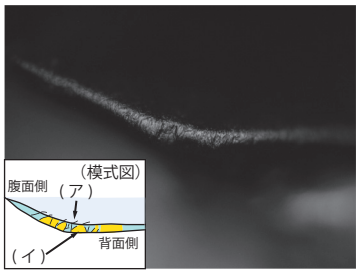
この径1m程度の規模の土坑は墓坑である可能性があり、掻器は副葬品となっていたことも考えられます。

北海道大学構内遺跡群から掻器が出土した地点の一覧

地点	地点名称	時　期	点　数	報告書
1	K39遺跡 創成科学研究棟地点	続縄文期後半（後北C2-D）	23	『北大構内の遺跡　14』
2	K39遺跡 北キャンパス道路地点北側	続縄文期後半（後北C2-D）	64	『北大構内の遺跡　18』
3	K39遺跡 北キャンパス道路地点南側	時期不明	2	『北大構内の遺跡　18』
4	K39遺跡 第９次調査地点	続縄文期後半（後北C2-D）	32	『札幌市文化財調査報告書　69』
5	K39遺跡 学生部体育館地点	続縄文期後半（後北C2-D）	4	『北大構内の遺跡　6』
6	K39遺跡 サッカー・ラグビー場地点	擦文期？	2	『北大構内の遺跡　14』
7	K39遺跡 薬学部電気配線地点	時期不明	1	『北大構内の遺跡　17』
8	K39遺跡 薬学部ファーマサイエンス研究棟地点	擦文期？	1	『北大構内の遺跡　21』
9	K39遺跡 工学部共用実験研究棟地点	続縄文期後半（北大）	133	『K39遺跡工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告書』
10	K39遺跡 ポプラ並木東地区地点	続縄文期後半（北大）	92	『北大構内の遺跡　5』
11	K39遺跡 中央道路共同溝地点	縄文晩期	2	『北大構内の遺跡　10』
12	K39遺跡 ゲストハウス地点	続縄文期前半	1	『北大構内の遺跡　10』
13	K39遺跡 人文・社会科学総合教育研究棟地点	縄文晩期～続縄文期前半	44	『K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅰ』
14	K39遺跡 農学部実験実習棟地点	続縄文期後半（北大）	40	『北大構内の遺跡　22』
15	K435遺跡 第２次調査地点	続縄文期後半（後北C2-D）	4	『札幌市文化財調査報告書　63』
16	C44遺跡 植物園収蔵庫地点	続縄文期後半（後北C2-D）	10	『北大構内の遺跡　18』

■ 掻器はどのように使われたのか





この掻器の刃部には直交・斜行する線状痕（ア）と使用痕光沢面（イ）（タイプ OB-E・B）が観察された。この光沢面タイプは実験によって、乾燥皮を対象とする作業もしくは木・竹・ひょうたん・なめし皮・草本を対象とする作業で形成されることが明らかにされている。

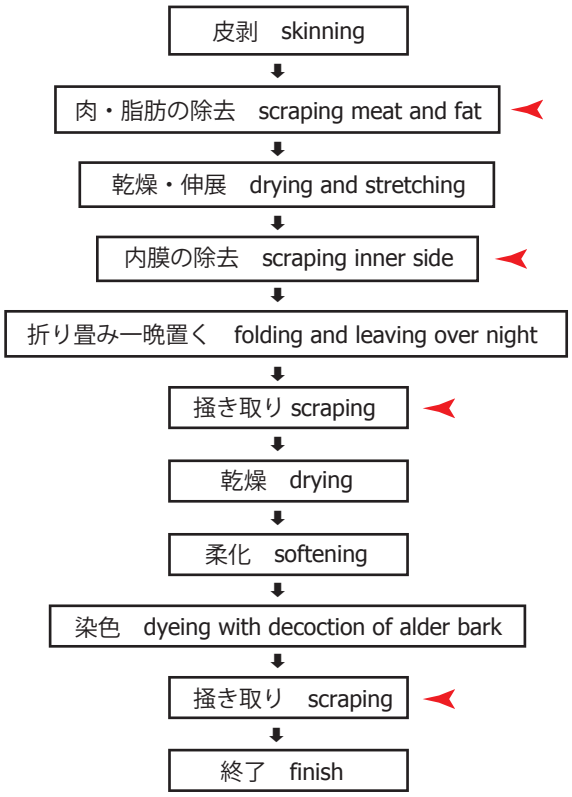
（200 倍で撮影、横幅は約 700μm）

▲工学部共用実験研究棟地点出土の掻器で確認された使用痕

（写真： 高瀬克範 2011「K39 遺跡工学部共用実験研究棟地点 8b 層出土石器群の使用痕分析」『K39 遺跡工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告書』）

掻器の用途を解明するためには、使用に伴って形成された痕跡（使用痕）を観察する必要があります。微細な痕跡の観察には顕微鏡が利用されます。代表的な使用痕跡として、線状痕と使用痕光沢面があります。線状痕からは石器が動かされた方向や操作方法（切削・穿孔など）、使用痕光沢面からは操作対象（骨・木・皮など）が推定されています。各地の遺跡で掻器の使用痕が分析されていますが、多くの場合で皮鞣しの作業に利用されていたと推定されています。

■ 皮鞣しのプロセス

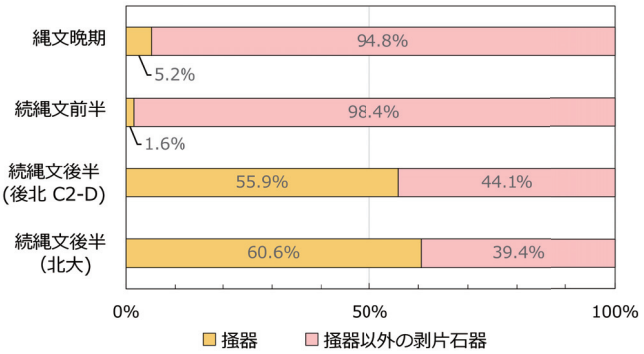


▲トナカイ遊牧民ユカギールがおこなっていた皮鞣しの工程

斎藤玲子 1998「極北地域における毛皮革の利用と技術」『北海道立北方民族博物館研究紀要』7

狩猟した獲物から、利用可能な皮革を得るまでには様々な工程を経る必要があります。掻器は、生皮から余分な肉・脂肪・内膜を除去する工程において利用されていました。

■ 掻器の時間的変遷



▲北海道大学構内の遺跡における剥片石器内で占める掻器の比率の変化

掻器は続縄文期後半の後北 C2-D 期や北大期になると、剥片石器のなかでしめる比率が著しく増加する傾向が認められます。この時期は、石器から鉄器への置換が進んだ時期なのですが、そのなかで掻器の必要性が高まっている点には注目が必要でしょう。この時期の掻器のほとんどは黒曜石製で、しかも長さが 2cm 前後の定形的なものによって占められています。木柄に装着し、皮鞣し作業が集中的に実施されていたことを物語っています。

■ 掻器の使用と装着



▲カムチャッカ半島のトナカイ遊牧民における木柄に装着された掻器を使ったトナカイの皮鞣し作業の様子（写真提供：高瀬克範氏）

掻器はそのまま使用される場合と何らかの柄に装着して使用される場合とがあります。カムチャッカ半島の民族事例では、トナカイの皮鞣しをおこなう際に、石製や鉄製の掻器が木の柄に装着して使用されていました。この場合には、刃部が木柄の長軸と平行になるように装着されています。遺跡から木製の柄が発見されることはまれなので、石器に形成される「装着痕」を見出そうとする試みが始められています。

■ 正倉院の皮革製品

正倉院といえば、聖武天皇・光明皇后ゆかりの品をはじめとする、奈良時代の多数の美術工芸品を収蔵していた宝物庫です。そこに収められていた宝物としては、瑠璃坏や螺鈿紫壇五弦琵琶、墨絵弾弓、金銀平文琴、木画紫壇棊局などが有名ですが、多くの皮革製品が含まれていることでも知られています。馬具や武具、刀剣、履物、帯、箱、楽器、筆、弓などの一部の材質に皮革が用いられており、鹿、牛、馬だけでなく、熊や海豹（アザラシ）、あるいは鱷（エイ）といった珍しいものも利用されていました（出口公長・竹之内一昭・奥村章・小澤正実2006「正倉院宝物特別調査報告皮革製宝物材質調査」『正倉院紀要』28）。なかでも鹿革には、千数百年の歳月を経ているにもかかわらず、柔軟性や色彩をよくとどめているものが含まれており、保管状況の良さだけでなく、現代のように化学的合成剤を用いない当時の皮鞣し技術の高さをも物語るといわれています（延喜式には脳漿や煙の燻しを用いた皮鞣し技術の記載があります）。

種　類	材　質
馬具（鞍）	鹿、牛、海豹、熊
武具（鞆、胡禄など）	牛、鹿、熊？
刀剣（把、鞘など）	鹿、牛、鱷
履物（底、甲など）	牛、鹿
帯	馬？
箱（漆皮箱など）	牛、猪
楽器（琵琶など）	？
その他（筆、弓、合子など）	牛、熊

▲正倉院宝物にみる皮革製品の種類と用いられている材質（出口公長ほか2006より）

■ 第17回遺跡トレイルウォークの開催（報告）





第17回の遺跡トレイルウォークを2017年7月9日に開催いたしました。今回のテーマは「セロンペツ川とその川沿いの遺跡をたどる」でした。セロンペツ川沿いの各所に残されている過去の地形の名残を観察し、遺跡とのかかわりを見学していきました。当日は、気温が30度に達する真夏日でしたが、多数の方々のご参加をいただき、盛会となりました。

■ 第7回企画展「掻器と皮鞣し」開催中



今回の特集テーマと連動する第7回の企画展が、当センターの展示室で開催中です。北大構内の遺跡（地点）から発掘された掻器を一堂に展示しているとともに、関連する北東アジア地域の民具などについても紹介しております。

編　集　後　記

寒冷地適応や交易、武具との関連など、皮革製品の生産と流通は、考古学・歴史学的にも興味深いテーマとなります。考古学的には、皮鞣しにかかわるモノと場を確認することから研究が始まります。本特集には高瀬克範氏、池谷和信氏よりご協力を賜りました。御礼申し上げます（高倉）。

北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター　第27号
平成29（2017）年8月31日発行

発行　：北海道大学埋蔵文化財調査センター
〒060-0811　札幌市北区北11条西7丁目
電話　：011-706-2671　FAX：011-706-2094
e-mail：hokudaimaibun@gmail.com
URL　：maibun.facility.hokudai.ac.jp